

実習日：平成 28 年度第 I 期 7 月 6 日

実習先：大分医師会立アルメイダ病院

大学名・学年：福岡大学薬学部 5 年

氏名：佐藤 愛子

到着し、まず私を迎え入れてくれたのは、元気のいいセミの鳴き声でした。

地上での僅かな時間を目一杯生きているセミのように、大分ゆふみ病院では、自分と向き合い、自分らしく目一杯生きている方々がいらっしゃいました。

ホスピスというと、片道切符、ターミナル医療、といったネガティブな印象が強いですが、疼痛コントロールができ体調がよければ、退院し自宅で過ごしながらか、外来治療のみ受けている患者さんも多いと知り、驚きました。このようなことができるのは、一度入院された方は何度でも受け入れができる体制が整っていて、家族にも積極的に声を掛けるなどのケアをしているからだと感じました。

大分ゆふみ病院ではたくさんのイベントを開催し、家族も気軽に訪れることができます。また患者さんが亡くなったあとも遺族と故人の思い出を語る会などを開催し、交流していました。このような取り組みを通し、遺族の悲しみや、故人が最期に寂しい思いをしたのではないかと、自分は何にもしてあげられなかったのではないかと、などの後悔が少しでも減るようケアをしている姿が印象的でした。

命があり、病気でない毎日は幸せなことだと私は思います。しかし、幸せのかたちは人それぞれです。病気で苦しんでいる人にも幸せな瞬間はあっていいのだし、遺族にもあると思います。ひとりひとりが幸せを感じる瞬間をこれ以上減らさないように、願わくは増えるようにしていくことが、ホスピスに携わる人の役割なのではないかと思いました。

治癒が目的である医療と、自分らしく穏やかに過ごすことが目的である医療があること。それぞれ目的は違いますが、どちらも尊い命のためのものだと感じました。

幸せ、命、医療、多くのことを考えた 1 日でした。ありがとうございました。